

AR CA DIA

66
WINTER 2016

Okazaki City Museum News

岡崎市美術博物館ニュース
[アルカディア]



岡崎市美術博物館

眼の極楽⑬ 江戸の花園

館長 榊原 悟

唐めきたる

実は『徒然草』が、「家にありたき木は」として柳、桜、楓、松を挙げた三九段、前掲した一節に加え、さらに次の「草は」のくだりが続く。むろん、それらの草も「家にありたき」すなわち「植栽したき」草花の謂であるのだろう。

草は山吹、藤、杜若、なでしこ。池には蓮。秋の草は萩、すすき、桔梗、萩、女郎花、藤袴、紫苑、われもかう、刈萱、龍膽、菊、黄菊も。薦、葛、朝顔、いづれも、いと高からず、ささやかなる垣に、しげからぬよし。この外の世にまれなるもの、唐めきたる名の聞きにくく、花も見なれぬなど、いとなつかしからず。おほかた、何も珍しくありがたきものは、よからぬ人のもて興ずるものなり。さやうのものなくてありなむ。

春、夏の草花に比し、秋のそれが多いのは、兼好の好みとも云えそうだが、それはまた「春秋の争い」で最終的に秋に軍配を挙げた額田王以来の、わたしたちの先祖たちの秋へ寄せる思いの深さを継ぐものでもあったのだろうか。

それにしても、これらの草花が栽培されていたと云う事実は、想定範囲とは云え、驚き以外の何ものでもない。もとより樹木などは、野にあるものを移植したに違いない。それらが成長し、庭の景観となる。『住吉物語絵巻』に登場した桜や楓、松などは、そうした樹木であったのだろう。兼好が「家にありたき」としてその名を挙げた草花も、そうであったはずだ。樹木以上に植え替えが簡便とみられる草花である。野に生えたものを採取した可能性は、樹木以上であった。が、さらに『大鏡』太政大臣伊尹の一節は、風流者として知られた花山法皇の御所の奇抜な趣向を伝える中で、

また撫子のたねを築地のうへにまかせたまへりければ、思ひがけぬ四方に、いろいろの唐錦をひきかけたように咲きたりしなど見たまへしは、いかにめでたく侍りしかは

と述べている。あたかも唐錦をかけたように、御所のあちこちに撫子が咲き乱れたという。その撫子は、なんと土塀の上に播いた種が四方に散って芽吹いたものであった。さしずめ『源氏物語』常夏に言う、

ESSAY

瞿麥の色をととのへたる、唐の倭の籬いとなつかしく結びなして、咲き乱れたる夕映いみじく見ゆ

瞿麥も、そうした種から育てたものであっただろう。籬に人の手で結ばれていることも、そう思わせるに足る(図1)。

加えて源経信(一〇二六〜九七)は承暦四年(一〇八〇)四月九日こんな風に記している。

常夏の花も遂にはちりければ

形見に是を以て送りたる

この歌一首を添えて、常夏の種を贈ることさえしているのだ(『帥記(経信卿記)』同日の条)。こと瞿麥に限れば、大伴家持が坂上大嬢に贈った歌

吾が屋外に蒔きし瞿麥いつしかも

花に咲きなむ比へつつ見む

に見るように、すでに万葉の時代から実生による栽培が行われていたことは間違いない。『万葉集』に十首に余る瞿麥の歌を遺し、この花を愛でること一入であった家持である。種から育てることは、そうした彼だけの特殊事例と言えなくもないが、むしろ、ここでは家持の瞿麥歌の背景に、こうした栽培体験で培われた眼とところがあつたことを知るべきだろう。

こんな歌も遺されている。

梓弓磯辺の小松誰が世にか

萬代かねて種をまきけむ

『古今和歌集』に載る読み人知らずの二首である。先にその多くが野にあるものを植え替えたのでは、と推定した松である。その松にして種を蒔き育てる。むろん、だからと云って、実際に庭に植栽された松で、種から育てられたものがどれほどであったか疑問だろう。しかし、その松にして実生もあり得た。となれば兼好が「家にありたき」として挙げた草花のいくつかは、種から丹精こめて育てられたものであったことは疑いない。当然それらを見つめる眼には濃やかさが増す。その草花の、最もそれらしく美しい姿が、季節と

とも鮮やかに記憶される。歌に詠まれ、絵に描かれるのも、そのかたちであつたはずだ。

つまりこう云うことである。万葉人や王朝人など、わたしたちの先祖の草花や樹木を見つめる眼を涵養するのに、その美しさや情趣を歌に詠むことが深く係わっているのは間違いないものの、それらを前栽で育て親しむこと自体も大きく与っていたのではないか。その意味でわたしたちは、前栽にどんな植物が植えられていたのか、植栽史研究の成果にもっともつと注意を払う必要があるだろう(飛田範夫著『日本庭園の植栽史』京都大学学術出版会 二〇〇二年)。夏の到来を告げる郭公が宿ると云う、あの卯の花も野にあるそれではなく、「わが宿のかきね」(源順)に咲く花であつたことを、この際思い出すべきだ。前掲した『徒然草』の「家にありたき」の一段は、そうした植栽史を知るためにも実に興味深い。

が、それだけではない。この一段には、さらにもう一点見逃し難いくだりがあつた。「この外の世にまれなるもの、唐めきたる名の聞きにくく、花も見なれぬなど、いとなつかしからず」である云う。珍奇なもの、見馴れぬものは「なつかしからず」、それ故にこそ好ましくないというのである。その最たるものが「唐めきたる名」の、すなわち舶載された草花であつた。別の段で、

唐の物は、葉の外は、なくとも事かくまじ(二〇段)

凡そめづらしき禽、あやしき獸、国に育はず(二二段)

と喝破した兼好である。珍奇で、それ故おそらく高価なものを排するのは、兼好の信念であつたのだろう。その兼好が選んだ草花が山吹以下のもので、それらを「家にありたき」とした。だがそれらは、単に「ごく普通に見慣れた草花ではない。ここが重要なのだが、それらは『古今和歌集』以来、和歌の世界の歌材として定着してきたものである、と云う(稲田利徳『徒然草』の草木をめぐって(上)岡山大学教育学部『研究集録』46号一九七七年)。和歌と植栽植物とが不可分の関係にあつたことが分かうと云うものだ。とは云え、こうした兼好の気持ちとは裏腹に、珍奇なものに惹かれるのも人情。実際、『明月記』嘉祿二年(一二三〇)五月十六日の条が伝えるように、

去今年宋朝之鳥獸、充滿于華洛、唐船任意之輩、面面渡之歟 豪家競而參養云々
洛中に充滿したかはともかく、権門貴族の間では舶載の鳥獸が飼育されていたと云う。さしずめ清少納言が「こと所の物なれど、鸚鵡いとあはれなり」(『枕草子』鳥は)と述べた鸚

ESSAY

鵡こそは、その代表だろうか。

むしろ草花・樹木の舶載もあつたに違いない。そう云えば、清少納言は、兼好とは逆に唐めきたるものに強く惹かれたようで、梨や桐など「もろこし」にて謂れのある樹木にこそ「めでたけれ」と感じ入っているのではないか(『枕草子』木の花は)。あんなでしこについても「唐のはさらなり」と述べ、やまとなでしこ(カワラナデシコ)より唐なでしこ(石竹)に軍配を挙げた。花山法皇の御所に咲いたなでしこも唐錦に準えられている限り、唐なでしこであつたはずだ。となると兼好が「家にありたき」としたなでしこは、やまと、唐、いずれのなでしこであつたのだろうか。いや、兼好の時代には、すでに柳や梅がそうであつたように、なでしこも唐めきたる存在からの脱皮を果たしていたかも知れない。なでしこはなでしこに決っているのではないかと。

面白いのは、兼好がその「家にありたき木」の段を草するに当って、『枕草子』の問題の「木の花は」「草の花は」や「木は」「草は」の諸段を強く意識している点である。『徒然草』のすべての註釈者が指摘する。しかも題材を同じくするだけでなく、文体までも模倣しているという。それによつて兼好は、『枕草子』との嗜好の異質性、同質性を際立たせようとしたのではないかと、との推測もある(稲田氏前掲論文)。唐めきたるものを好ましくしないとする自らの主張に説得力を与えるためである。その工夫の成果は、兼好が『枕草子』か、どちらの主張に理があるかだが、そのことは実はさしたる問題ではない。重要なことは、こうして和歌の歌材ともなつた草花や樹木に、さらに唐めきたる植物が加わり、わたしたちの植物に対する眼と情報が豊かになつたことである。モチーフの増加である。その豊富なモチーフを自在に駆使して構成したものこそ「花鳥図」、なかならず近世初期、狩野元信によつて定型を見た「四季花鳥図屏風」ではなかつたか。もとより、そこに至るまでには、なお幾多の曲折が予想されるだろう。そうであつたにしても「四季花鳥図」に、わたしたちの先祖たちの見つけた花と鳥たちのエッセンスが集約されている、とみることに無理はない。そこにどんな草木・花鳥が取上げられていたのか、興味は尽きない。



図1『源氏物語四季賀絵巻』(MOA美術館蔵)のうち常夏 住吉具慶筆

展覧会「暮らしのうつりかわり」も四回目となりました。例年は岡崎市美術博物館で開催している展覧会ですが、施設改修工事のため三月末まで休館していますので、今年は会場をおかざき世界子ども美術博物館に移して、二館共催で開催いたします。

暮らしの変遷をテーマに、岡崎市美術博物館とおかざき世界子ども美術博物館が所蔵する古い生活道具や、小学校の教科書、玩具などを中心に紹介していきます。いろいろな生活道具は多くの方々からの寄贈品でもあり、身近な郷土の暮らしを伝える資料として公開し、後世へ伝えることを兼ねた展覧会でもあります。

そして、公立小学校三年生の社会科「くらしのうつりかわり」への学習支援も兼ねて、子どもたちに昔の道具の実物を間近に見てもらい、観察してもらい機会を提供するものです。子どもたちに、昔の人たちが道具を大切に使ってきたというのを感じてもらおう、身の回りの古い道具を探し、昔の暮らしの様子をさぐる手助けとなればと考えます。平日には小学校の団体見学が予定されていま

す。会場で小学生の見学に居合わせたら、道具を使ったお話をしあわせて下さい。それが何よりの解説になるはずです。

また、大人の方には暮らしのうつりかわりを振り返ることで単に懐かしさだけでなく、昔の人の道具への工夫や知恵を見直す機会にして下さい。今の私たちの生活を再認識し、生活のなかに受け継がれている知恵と工夫を見つけていただく場にできればと考えます。

展示構成

□暮らしの道具

生活スタイルの変化や技術の進歩に伴って、伝統的な生活道具は姿を消していきました。今を生きる私たちは快適で、便利な生活を享受しています。ここでは衣食住などの生活道具を、明治から平成の初めにかけて岡崎市内で実際に使われたものを中心に紹介していきます。生活道具がいかに姿を変え、私たちの暮らしがどれほど便利になったのかを振り返ってみて下さい。

「内容」

茶の間、台所の道具、食卓の道具、水まわりの道具、裁縫の道具、明かりの道具、暖房の道具、住まいの道具など

□小学校と遊び

大正から昭和戦前にかけて小学校で使われた教科書や道具類を中心に、子どもたちが遊んだ玩具などを展示し、学びと遊びの道具のうつりかわりをさぐります。実際に教科書を手に取って見てみる、玩具で遊んでみるなどの体験スペースもあります。

「内容」

教科書、掛図、筆箱、算盤、オルガン、運動足袋、凧、コマ、かるた、双六、ブリキのおもちゃなど

会場では親子や家族で、友人や知人らで楽しく語らいながら見て回って下さい。自身が当り前と思っていた記憶が実はそうではなかった！驚きの発見がきつとあることでしょう。ありふれた日々の暮らしを支え、学校生活を支えてきた働きモノの道具たち。その時あの時の記憶、そして、あなた自身や家族の懐かしい姿が浮かびあがってくると思います。

収蔵品展

暮らしの うつりかわり

伊藤久美子

会期：平成28年1月16日(土)～3月6日(日)



小便器

市制100周年・岡崎市美術館 開館20周年記念

大鎖国展

—江戸に咲いた異国の花—

湯谷翔悟



谷文児《ファン・ロイエン筆花鳥図模写》神戸市立博物館

こんなに紹介が簡単で困難な展覧会もそうはありません。

良いもの揃いました。ぜひお越しください！

そう、たったこれだけ。けど二方で、紹介したい資料を挙げだしたらキリがなく、この紙面では到底足りなくなってしまう。悩ましい限りです。そこで今回は、展覧会のきっかけ、この展覧会で届きたいこと、歴史だけじゃない、この展覧会の見所をお話していくことにします。資料の紹介はまたチラシやホームページ等で…

◆家康後の日本とは

本年度は家康公四百年祭として、岡崎・浜松・静岡の三市を中心に、家康顕彰のイベントが数多く行われました。しかし家康の一番の事績は二六〇年にも

EXHIBITION

渡る泰平の礎を築いたことです。「没後四百年」（家康は二六六年に薨去したので、二〇一六年が四百年周年とも言えますが）に当たる来年度は、家康個人の足跡を辿るのではなく、家康没後の日本にスポットを当てていくことが必要なのでは。「祭」を二過性のものに終わらせることなく次の時代に繋ぐためにも、江戸時代と正面から向き合った展示が必要なのではないか。そこで取り上げたテーマが「鎖国」だったのです。

◆「鎖国」に縛られているのは江戸時代か現代か？

「鎖国」という非常に大きなテーマゆえ、軸をどこに置くか悩みました。研究が進展し、一般書でも「鎖国」じゃなかった！と喧伝しています。しかし一方で海外との交流が制限されていたのもまた事実。そこで本展は、皆さまに江戸時代の優品と向き合って、思いを巡らせていただきたいと思い準備しています。「意外と江戸時代にも海外のモノ入って来てるじゃん」と思うのも、「やっぱり江戸時代の日本って、海外との繋がりが希薄だよなあ」と感じるのも良しです。だけど、貴方が抱いていた「江戸時代の日本と世界」とは違う、新たなイメージを描き出していただけのこと

と思います。

◆美術好きのアナタにこそ！

この展覧会は、展覧会名を見て「あらあ、歴史の展示なのネ。私美術が好きなノ、残念」と思った方にこそお越しいただきたい内容となっています。小田野直武「鷺図」（歸空庵）、司馬江漢「相州鎌倉七里浜図屏風」（神戸市立博物館、重文）、若杉五十八「西洋人物図」（住友史料館）など、海外との交流がなければ生まれ得なかった秋田蘭画・南蘋風・洋風画などの作品も数多く出品しているからです。他にも地球儀・天球儀や琉球漆器、踏絵やラクダ、エレキテルやアイヌの装飾品まで…。美術博物館ならではの、歴史や美術の粹に捉われない幅広い資料が並ぶので、きっと「来てよかった！」と思っただけの逸品に巡り合えると思います。

岡崎市市制施行二〇〇周年・当館開館二〇周年という二重の節目の年となる二〇一六年。この記念すべき年だから一堂に会することができた、国宝重文二〇点余りを含む約一六〇点の資料で、江戸の中の世界を紐解いていきます。

見所は、そのすべてです。

会期：平成28年4月9日（土）～平成28年5月22日（日）

展示室改修・照明について

野澤太雅

前号の原稿を執筆している段階では、まだ工事用の足場を組み立てている段階だったが、月日が経つのは早いもので。現在は展示室内の各種修繕を含む、建築系工事の大半が終了。外部足場も殆どが撤去され、従前の姿を取り戻しつつある。

さて。この改修工事の時期にあわせ、LEDスポットライトを本格導入する運びになったのだが、いくつか厄介なハードルが存在する。

まず、展示室天井のルーバーより上に、スポットライト取り付けのための配線ダクト（ライティンググレイル）がある事。通常、15cm四方のルーバーの隙間を通してここにスポットライトをはめ込む。このため、一般的な横長の直方体の調光ユニットがあるタイプだと、そのままでは使用出来ない。15cmほど「首を伸ばす」というような加工が必須で、それが（現実的な価格内で）実現可能かどうか。

また、高さ5メートル超の高天井から、絵画等を飾る場合を想定し地上高1.4mでの照度が100ルクス前後、欲を言えば150ルクス出せるか。この条件を満たしつつ同

時に、平均演色評価数はRa90以上が望ましく、特殊演色評価数もできるだけ高い方が望ましい。今までのLEDスポットライトでは両立が難しかった演色性と明るさを、どこまで実現してもらえるのか。

他に、高演色を売りに登場してきている紫励起LEDは、美術品損傷に関連する近紫外線を出してしまう問題があるのだが、これにどう対処しているか。青色励起LEDであれば、青色ピークの問題や、一部の特殊演色評価数の低さをどう改善できているか。

そして、当館で開催した展覧会に足を運んで頂いた方はご記憶にあるかもしれないが、絵画だけを四角く切って照らすような「フレイミング」が可能である事。

このように要望を並べてみたが、なんてワガママ坊やなんだろうと我ながら苦笑い。

だが。この困難な「クエスト」に挑む『勇者』は、いた。

COLUMN & TOPIC

美術博物館 家康公四百年祭を終えて

浦野加穂子

徳川家康没後四百年を記念して、当館では家康公顕彰事業として講演会「三河時代の家康を考える」（六月〜十二月、全六回）そして三河時代の家康の足跡をたどるバスツアー（全五回）を企画し、全日程を無事終了いたしました。

館外のホールを会場にした大規模な連続講演会は当館初の試みでしたが、毎回定員の二五〇名を大幅に上回り、全六回を通して県内外より二七二名もの皆様に御来聴いただきました。今回の講演会は家康が岡崎に生まれ、三河を統一、遠州攻略により浜松に居城を移すまでの約三十年間について「家康研究の先前線」「三河一回」揆「花押」「東三河攻略」「城」「遠州攻略」を各回のテーマとして、家康や同時代研究の第一人者を講師に迎え、歴史学の最新の情報や研究成果、問題点などについて講演いただき、その後講師とコメンテーターの対談により、論点を深めていきました。本講演会を通して、家康に関する新たな事実や論点を市民の皆様にご理解いただくとともに、より豊かな家康像を構築し、家康の顕彰に繋げることができたのではないかと思います。

バスツアーも各回とも定員三〇名の二〇倍を超える応募を頂き、家康に対する関心の高さを改めて実感しました。幸い天候に恵まれ、家康の転機となった桶狭間古戦場跡や大樹寺、吉良の東条城跡や西尾城、三河一回揆の本宗寺や本證寺、東三河の牛久保城跡や吉田城、さらに遠州の井伊谷城跡や浜松城など三河から遠州へ進出していった若き日の家康の足跡を追体験しました。専門家の案内のもと史跡を歩くと、その場でしか得られない多くの情報や発見があり、参加者の皆様には現地を訪れる事の大切さを改めて感じて頂けたのではないかと思います。

最後になりましたが、本事業に御協力いただきました皆様に心より御礼申し上げます。



二〇一六年度展覧会について

二〇一六年は岡崎市市制施行一〇〇周年、開館二〇周年という、二重の節目に当たります。四月からのラインナップを紹介します。

大鎖国展

再始動を飾る展覧会です。ご期待ください！(詳細は4頁)

福山の文化財展

広島県福山市は岡崎市と同じ大正五年七月一日に市制を施行しました。本展では共に市制百周年を迎える福山の歴史と文化を物語る文化財の優品を紹介し、さらなる交流の契機にしたいと思います。

岡崎美術の一〇〇年

本展では市制一〇〇年を記念し、岡崎の美術文化の発展に寄与した芸術家と美術協会の流れなどと比較しながら作品をご紹介します。

第六十九回岡崎美術展

大正末から開催されてきた一般公募の美術展覧会で六十九回を迎えます。市民の皆様力作を展示いたしますので、ご覧ください。

ブリュッゲルとバロックの巨匠

二〇一六年に二二〇周年を迎えるチエコ最古のプラハ国立美術館の至宝ブリュッゲルの特別出品をはじめ、ヨーロッパ各美術館からレンブラント、ベラスケスなどの名品を一堂に展観。光と影のバロック芸術を間近にご鑑賞ください。

長谷川瀧二郎展

静謐で幻想的な画境を極め高い評価を得ている長谷川瀧二郎。本展は岡崎市の収集家故藤井純一氏が生涯をかけ蒐集した油彩、スケッチ、画具に至るまで初公開を多数含む過去最大級の資料によって、画家の神髄と知られざる素顔に迫ります。

暮らしのうつりかわり

寄贈された古い生活・生産道具を紹介しながら、私達の暮らしがどのように変わってきたのかをたどります。小学三年生の学習支援も兼ね、子ども達の見学に配慮した内容と工夫を凝らします。

COLUMN & TOPIC

私の心象資料 中根家文書

堀江登志実

当館でお世話になった新行紀一先生(愛知教育大学名誉教授)が昨年四月亡くなった。先生には私が岡崎市の学芸員となつてから三十余年程お世話なつた。就職して間もない頃であろう。市内大西町の自宅に当時同僚だった荒井ともに招待してください。囲炉裏のある部屋で酒を酌み交わし、晩泊めて下さったことは今でも鮮やかに脳裏に残っている。学芸員としての将来に対する荒井と私に対する期待からのことだったと今でも思っている。

そんな新行先生との関係の上で語らなければならない資料に中根家文書がある。同文書は岡崎藩家老中根家に伝来した文書で、その一部は昭和四十二年に岡崎市に寄付されている。その受入れに尽力されたのが新行紀一先生と奥様の和子先生である。その後、中根家子孫の中根忠之宅にさらに資料文書があることが判明。資料がある大分市に毎年のように新行先生、当館同僚とともに出張、調査は七・八回にも及び、撮影したミニコーピーフィルムは二千本余に及んだと記憶している。中根忠之さんを囲んでの新行先生

や当館職員との団欒、奥様の家庭料理、関サバの話題など生涯忘れることのできない思い出である。

大分市の調査の成果は現在、岡崎市史料叢書「中根家文書」上・下巻として結実し、岡崎藩の藩政を語る上では欠かせない史料となっている。何回にもわたる中根家文書の調査を大分市の中根さんに認めていただけたのは、新行先生夫妻と中根忠之さんの先代との交流があったからである。

学芸員は資料に向き合い調査研究をするが、その資料と学芸員の間には人が介在している。その人というのは資料の所蔵者であったり、情報提供者であったりする。学芸員は物を調査・研究・展示することを対象とするがそれは人との関係の上に成立している。長年の信頼関係から資料を収集できたときの喜びはこのうえもないものである。熱い思いで収集できた資料には、心ざまざまな風景や思いが浮かぶ。それこそ個人のみに内在する心象資料であろう。

INFORMATION

■平成27年度収蔵品展

暮らしのうつりかわり

平成28年1月16日(土)～3月6日(日)

会場：おかざき世界子ども美術博物館(岡崎市岡町字鳥居戸1-1)

岡崎市美術博物館は休館のため、おかざき世界子ども美術博物館で開催します。

開館時間：9:00～17:00(入館は16:30まで)

休館日：毎週月曜日、2月12日(金)

観覧料：一般300円(240円)／小中学生100円(80円)

* ()内は20名以上の団体料金 * 岡崎市内の小中学生は無料(わくわくカードまたは生徒手帳を提示) * 各種障がい者手帳の交付を受けている者及びその介助者は無料(各種手帳を提示)

関連イベント：子どもわくわく!教室(小学生対象)

日時：1月30日(土)・2月13日(土)・2月27日(土)・3月6日(日)

各日2回(①10:30～、②13:30～)

参加費：無料(観覧チケットが必要)

■『狩野探幽—御用絵師の肖像』が徳川賞を受賞しました

公益財団法人徳川記念財団が実施する「第13回徳川賞」に、当館館長榊原悟の著書『狩野探幽—御用絵師の肖像』(臨川書店、平成26年)が選ばれ、平成27年11月3日に授与式が行われました。



自動ドアにみるバリと岡崎

現在改修中の当館は、全館をぐるりと足場に囲まれて、パリのポンピドゥー・センター(国立近代美術館)を想起させる外観になっています。そこにクリエイティブで前衛的なイメージを重ねて、このままの方がむしろ良いのではないかと思ってしまう。ポンピドゥー・センターといえば、先日、当館とささやかな関連があることに気づきました。当館のエントランスの自動ドアは、センサーが入館者を感じ知すると、瞬時に手前に開くので「おっ!」と思われた方もいらっしゃるのではないのでしょうか。この方式は当初から賛否両論ありましたが、私は他の建築に設置例を見たことがないことから館の個性として気に入っていました。ところが先日ポンピドゥー・センターに行った折、上層階の通路に同型の「手前に開く自動ドア」を発見!関心をもってしばしそのドアを通る人々を観察していると、やはり想定外の動きをする自動ドアに戸惑う姿が見られました。そもそも西洋のドアは手前に開くもの、左右に開く引き戸式はアジアの方式が基となっており、自動ドア大国となった日本仕様ともいえます。それが世界各国のドア文化を根本から変えてしまったという側面もありますが、あえて西洋式の手前に開く扉に回帰したともとれるポンピドゥー・センターの自動ドアは、レンツォ・ピアノがそれを意図してかどうかは別として、ここに東西の文化を取り入れていこうとする当館のエスプリが重なり合ったようで嬉しく思いました。(村)

おしゃべり、あれこれ。

金剛杖

二〇一五年八月、〇合目からの富士登山に挑戦した。北口本宮富士浅間神社が発点。前日に神社で素木の金剛杖を購入。富士山では合目・山小屋ごとで金剛杖に焼印を捺してもらえる。しかし五合目まで小屋は今はなく、五合目の佐藤小屋でそれまでの合目の焼印をもらおう。所謂「焼山」から六合目。多くの人はここから登る。「今からが本当のスタート...」絶望的な心をもう一度引き締める。礫は次第に岩になり、金剛杖が役立たない。陽が傾き焦るのに、脚は重く酸素も薄い。七合目辺りから、焼鏝を持った人が困り出した。焼印を捺す所が無くなってきた金剛杖に、自分の来し道、富士の大きさを思い知らされる。六根清浄、六根清浄...。八・五合目で仮眠をとり、午前一時に出発。次第に白む空に焦る気持ち。何とか山頂で来光を...。

頂から拝む朝日は、思ったほどではなかった。けれど、全ての苦勞を忘却させるには充分であった。そして一世代の大イベントを終え、金剛杖片手に記念撮影。富士はやはり観る山かもしれない。だが登る山としても他では得難い何かがある。それが何とは言いいくけども、少なくとも隙間なく焼印の捺された金剛杖は、自分の二〇一五年を特別なものにしてくれた。(湯谷)

編集後記 | 表紙は「人間と精神のための椅子」から見上げた工事の様子です。アトリウムのガラスも綺麗になり、マインドスケープもより鮮明に見えてくるかもしれません。工事もほぼ完了し、再オープンに向けて準備を進めています。より多くのお客様の心に残る、心を映すミュージアムとなるべく、さらに前進してまいります。(湯谷)



岡崎市美術博物館

設備改修工事のため、
岡崎市美術博物館は平成28年3月31日まで休館します。

<http://www.city.okazaki.lg.jp/museum/index.html>

【岡崎市美術博物館ニュース／アルカディア】 第66号 2016年1月発行

編集・発行 岡崎市美術博物館(マインドスケープ・ミュージアム)

〒444-0002 愛知県岡崎市高隆寺町峠1 岡崎中央総合公園内

TEL.0564-28-5000(代表)

ARCADIA